

信仰と詩作の背理

——八木重吉「私の詩」の解釈をめぐって——

四十宮 英 樹

八木重吉は明治三十一年（一八九八）二月九日に生まれ、昭和二年（一九二七）十月二十六日に結核で亡くなった。二十九歳の生涯の後、二冊の詩集が残った。生きている間は、彼は無名の詩人だった。彼は無教会派のキリスト教徒であり、二十三歳から五年間、英語教師だった。二人の子と妻に囲まれたその生活は決して劇的なものではなかった。ただ、彼の信仰と詩作は、その生活をめぐって緊張した関係におかれた¹⁾。

本稿は、大正十四年（一九二五）における八木重吉の詩、なかでも同年十一月に書かれた「私の詩」という詩に注目し、それに解釈作業を施すことで、この時期の彼の意識における、信仰と詩作の位相を明らかにすることを目的とする。このことは、その信仰と詩作との間に介在した背理に対して、彼がどのような態度をとったかを知る上で必要な作業であり、キリスト教詩人としての彼の内面を明らかにすることに貢献すると考えられ

る。（以下の八木の詩の引用はすべて『八木重吉全集』全三巻、筑摩書房、S・57・9～12に拠った。なお、引用文中の仮名遣いにおいて八木固有の用字癖がみられるが、ここでは全集の表記に従うものとする）

一 問題の所在

(1) 私の詩

（私の詩をよんでくださる方へささぐ）

裸になつてとびだし

基督のあしもとにひざまづきたい

しかしわたしには妻と子があります

すてることができるだけ捨てます

けれど妻と子をすてることはできない

妻と子をすてぬゆえならば

永劫の罪もくゆるところではない

ここに私の詩があります

これが私の贖である

これらは必ずひとつひとつ十字架を背負ふてゐる

これらはわたしの血をあびてゐる

手をふれることもできぬほど淡々しくみえても

かならずあなたの肺腑へくひさがつて涙をながす

すでに述べたように、これは八木が大正十四年十一月に書いた作品だが、この詩について、田中清光はその著書『詩人八木重吉』で次のように述べている。

この詩には、詩人が信仰との狭間に詩を存立させる在りようの、ぎりぎりの自己主張がみられる。「ひとつひとつ十字架を背負う」「わたしの血を浴びている」という詩の必死の自立とは、まさに重吉の詩のほほさいごに位置しているが、極限へとゆかしめた〈言葉〉の耐ええたものをあらわにしつつ、反面、それがいよいよその信仰をつきつめさせてゆくものともなっていたことを示している。⁽²⁾

右の詩を一つの「極限」とみなすのは私も同じであり、その

内容が八木の「ぎりぎりの自己主張」である点についても同意する。その意味で田中のこの指摘は重要だ。だが、私がこの詩を「極限」とみなすのは、この詩において八木の信仰の理念が到達した「さいごに位置している」からではない。この詩の後にも「ノオト」に代表される詩稿が書かれており、それこそが八木の詩作の過程において「さいごに位置している」からだ。

私がこの詩を高く評価するのは、表現者としての彼の「自己主張」が、錯綜した作品の内容にもかかわらず、明確に伝わってくるからなのだ。もちろん、作品の複雑さは、そのまま作品の価値の高さに結びつくわけではない。また、詩としての価値が、そのまま信仰者としての誠実を保証するものでもない。だが、この作品においては、その複雑さが、彼の表現者としての意識に密接に関わることによつて、八木の内面の切実な表現となりえている。その機制を分析することは、すでに述べたように、彼の表現と信仰に対する姿勢を明らかにする上で重要な役割を果たすと考えられる。後述するように、たとえばこの詩における「私の贖」・「わたしの血」といった語句は、この時期の八木の他の詩との関連をも視野に入れたときに初めてその重要性が理解可能となるのであり、その意味で、田中が指摘した地点よりもさらに踏み込んだ解釈作業が必要となるのである。

以下、この詩の具体的な分析に入るが、その前に、次節では、この大正十四年にみられる八木の、詩に対する彼自身の姿勢の

変化について検討しておきたい。

二 信仰と詩作の葛藤について

この年、大正十四年一月の八木の詩稿には、信仰と詩作についての葛藤が注目すべき形で現れている。

(2) わたしみづからも

だれにもしられず

わたしのうたもひとにしられず

二つのものがむなしく土にかへっていても
それでも悔いなきをみたい

(3) うたもひとつの行^{せむ}ひである
キリストはおしへていった

よきおこなひはかくれてなせと

わたしのうたがほんとうにねうちあるなら
かくしておいてもころがいらだたぬはず

(4) ほんとうにうたにもえるうたびとは

あまりにうたにもえるそのゆえに

うたの集をだしたいときさへかんがへはしまい

(5) あるときは

うたをつくるのさへ悪であるとおもふ

こんな詩などつくらなければ

ほんとにわたしのせけんのよくほうはなくなる

そうしたら一挙にわたしのころはきれいになってしまふ

かもしれぬ

だがまたかんがへてみれば

たったひとつの手すさびでありほこりである

かなしみでありよろこびである

詩をつくることをすててしまふなら

あまりにすぎだらけのうつろすぎるわたしのせかいだもの

ここにこうして不覚の子は

歯をくひしばって泣くまいとしてうたをうたふ

これらはすべて大正十四年一月に集中的に書かれたものだが、ここには八木の、世俗的な功名心に対する葛藤が明瞭に現れている。これらの詩には、自分自身の存在に対する、いわば無私への希求の念が内包されている。しかし、たとえば(2)の詩において「わたしみづから」と「わたしのうた」とが等価に語られているように、ここでは八木の、自己の詩に対する執着の存在自体が否定されているわけではない。むしろ、自己の詩につい

て苛立てば苛立つほど、その裏側にひそむ執着が浮き彫りにされるといつてよい。(5)の「せけん的のよくほう」に対する嫌悪は、かえつて八木の焦燥が何に起因しているかを明確に示している。

だが、同時に、これらの詩にみられる生々しい葛藤が、彼が自分の詩作に対して新たな意義を見出す方向へ、つまり、自分が何故詩を書くのかという自覚を促す方向へ作用することに役立った、その兆しをみる事が出来る。たとえば(5)における「不覚の子」や「泣くまいとしてうたをうたふ」といった語句からは、自己劇化による陶醉の匂いといったものがかなり拭い去られてゐる。ここに書かれてゐるのは、ありうべき詩作への空想的な理想ではなく、今、現在の自分の詩作してゐるその状態の分析であり、その意味では彼が自己の在り方についてその自覚を深める可能性を示してゐるといつてよい。もちろん葛藤は明瞭に存在し、彼自身がそれを自覚的に処理しきれていない以上、ここでの姿勢はまだ脆弱なものであるが、彼の詩作に対する自覚が深化する契機として注目に値するであらう。

たとえば、同じ大正十四年一月には、

(6)詩はなにゆえにとほといか

なにものもうばうことのできぬせかいであるゆえ、

かなしい日はかなしみのみちをゆきくらし

よろこびの日はよろこびのみちをゆきくらし
たんねんにいちねんにあゆんできたゆえ
かすかなまことがみえてきた、

じぶんでみつけねばたれも力をかしてくれぬ

このひとすぢのたびはつらかつたが

こわたれぬせかいがすこしみえてきたかたじけなさ、

わたしを殺さねばこのせかいはうはへぬ、

わたしのようにくるしみ

わたしのようになめぐまれてあらねばこのせかいはみえぬ、

いつの日からんらんとみえてくるだらう

いつかはつきりとうたをみる事ができるだらう

という詩が作られているが、ここには、右にみたような葛藤がどのような方向に彼の自覚を踏み切らせようとしているのが、より鮮やかな形で示されている。

つまり、詩を、「なにものもうばうことのできぬせかい」と言明した上で、「わたしを殺さねばこのせかいはうはへぬ」と言い切る、その意志表示の断定の強さは、それ以前の自己の詩に言及した作品とは全く異なるものだ。ここでは彼は、〈詩〉と〈表現者としての自己〉との関係の緊密さを対象化し、明確に意識することが可能な場所に立っている。〈詩〉という代物が追い求めるべき彼方にあるものだという、『秋の瞳』にも反映されてい

る認識から、〈詩〉が「わたし」という存在に欠かすことの出来ないものだという認識への転換は、重要である。何故なら、このような転換は、「わたしみづから」が「かみの観念」の高さに立つといった抽象的な詩作の理想から脱し、今、この現在の自分の在り方を取り込んだ具体的な詩作の可能性を開くことにながるからだ。

まだこの詩においては、詩作と信仰、あるいは家族に代表される生活といったものとの関わりを、全体的な視野から統合してゆくといった段階には至っていないが、彼自身と詩との不可分な関係を認識し、自己の葛藤を見据えた上で肯定してゆくその自覚の在り方は、彼の詩に対する関わり方の変化を示すものであると考えられる。

このように、これらの詩を書いた大正十四年一月は八木にとって、彼自身の詩作に対する姿勢の転機であると考えられ、

(7) 生くるみちは

ひとつきりない

そのように詩のみちもひとつきりない

というような簡潔な意志の表明がみられる。

もちろん、前述したように葛藤が完全に消滅したわけではなく、

(8) わたしが

詩をすするとき

わたしはほんとのひとになれる

(9) かなしみの

わきいづるうちは

このうたもつきまい

うたひもせず

かなしさもあらぬ

気もとほくなるようなひるさがり

(10) じざいに

詩がつくれてきたら

だれにみてもらわなくても

ところが

まんどくしてきたら

そのときこそ

ひといろのさびしさがみえてこよう

(11) 詩さへもはかない

これもすてよう

こうおもへばかるやかだ

最初の二つが大正十四年四月に、残り二つがそれぞれ同年五月と六月に詩稿として書かれている。このようにその後も彼の内面において詩を作ることに對する葛藤が続くことになる。このことがある意味では八木が「私の詩」を書かざるをえない伏線になっている。ただ、これらの例についていうなら、その全体の調子はこれまでに引用したものに比べると若干穏やかになつていくことが分かる。苛立ちというよりはむしろ諦念に近い感情すら見出すことが出来る。

結局、このような詩群に見出せる感情の推移が、背景として「私の詩」を書くに至る八木の内面に存在するといえる。

三 「私の詩」の特徴について

このような背景を視野にいれた上で再び「私の詩」に戻るが、この詩の特徴を明らかにするためには、まず、次の詩と比較することから始めると分かりやすいだろう。

(12) あらゆるものをして

十字架を負ひてわれにしたがへ、と

ああ なんといふきびしい仰せでせう、

しかし わたしは あなたにひきつけられてなりません

ただひとり たいしい方のようにおもへてなりません、

ささやかではありますが

わたくしには捨てきれぬものがあります、

わたしは妻と子をやしなわねばなりません

みづからの弱いからだをころしたなら

わたしにのこされたものも死ぬかもしれません、

われらをささへんがために

ここにもないなりわひに追われてをります、

(中略)

命を捨つるものは生くべし、と

あなたはあきらかに仰せられます、

けわしいみちです、

わたしのよななものにはゆきがたいたかさです、

なんぢの信なんぢをすくへり、と

あなたはあきらかにこうも仰せられます、

ああ、ゆこう、

ほとんど死をみつめてゆくようなおもひではあるが

あゆんでみよう あゆんでみよう

死ぬるその日まで あゆんでゆこう

(中略)

ただ死のようなひとつのねがひがあつて

ささやかではあるが

そのねがひの芽がわたしをこのみちへすひよせてゆく、

全五十一行の長詩であるため途中を省略したが、この詩は、「私の詩」の一年前、大正十三年十一月に書かれている。この二つの詩は、「へ生活」と「信仰」との対立の自覚というモチーフにおいて共通するものがあり、しかもそれが「妻と子」や「十字架」といった語句に同じように象徴されているということなどを併せ考えるとある意味では、この(12)の詩は、「私の詩」の原型であるとみなせるかも知れない。

だがしかし、以下に述べるように、一読すれば「私の詩」の方がモチーフの共通性などにもかかわらず、(12)よりも表現としてはるかに緊張を持統させていることが分かる。

私見では、そのような効果もたらされるのは、「私の詩」が「贖」であり「十字架を背負ふてゐる」という表現に込められた、自己認識の切実さによる。

もちろん、表現という点から考えるなら、「私の詩」における自己の作りあげた詩が「贖」であるという比喩自体が生々しいものであることは確かであろう。「十字架を背負ふてゐる」・「血」・「肺腑へくひさがって涙をながす」といった生々しい語句が断定的な口調と連鎖することで、切迫した印象を読む者に對して喚起する。だがそれだけではない理由が「私の詩」には

存在する。

これに比べると、(12)の詩はかなり冗長であるといえる。それは長さの問題だけでなく、たとえば冒頭にみられるような、ともすれば感傷に堕しかねない告白調で表現しているといった形式的な問題も関わってくる。だがこの場合は、そのような表面的なことよりもむしろ、大正十三年十一月時点で、八木が自己のなかで「へ生活者」と「信仰者」とをどのように位置づけるか把握しきつていなかったことにこの冗長さの原因があると考えられる。そこでは確かに彼は「へ生活」と「信仰」との対立を認めている。だが、この両者を統合してゆくだけの立場は確立していない。そのために混乱をその内容から払拭しきれない。自分自身を「わたしのようなもの」と形容する態度が、ここでは謙遜の域をこえて自己憐憫に近付いており、八木の思いを裏切つて、その切実さを弱いものにしてしている。ここには、内面の混乱を混乱のままに受容しそれに溺れている消極的な意思が背後にうかがえる。

それに対して「私の詩」では、そのような弱さは払拭されている。すでに述べたように彼は、ここで「へ生活者としての自己」と「信仰者としての自己」とを自覚的に統合するために自分の書く詩を「贖」として位置づける。このような位置づけは重要である。この「贖」という一語に込められた認識の切実さによって「私の詩」は(12)の詩を凌駕する。何故なら、ここで八木は

初めて、書くことが何らかの代償を含む行為であるという認識を得ているといえるからだ。つまり、八木はこの詩において自分の表現が「贖罪」のために存在していることを示している。より具体的にいうなら、八木は、ここで「生活者」と「信仰者」との矛盾とを贖う行為として、自分の詩を位置づけている。これは、(12)の詩に比べたとき、はるかに自己の置かれている状況に対して積極的な態度であるといえる。このような態度は、当然、表現の他の箇所にも反映されている。たとえば「妻と子をすてぬゆえならば／永劫の罪もくゆるところではない」という思いきった断言は、敬虔な信仰者としての八木、といったイメージを揺るがせるものであるが、このフレーズが作品全体から浮き上がっていないのは、この言葉に込められた決意の激しさが、「贖」という語句に込められた自覚に対する確信の強さに釣り合っているからである。

だが、自分の詩が「贖」であるという自覚が、どうして「生活者としての自己」と「信仰者としての自己」とを統一するよりに機能するのか。

このことを考えたとき、自分の詩が「贖」であるという意識の背後には実は、信仰者としての、あるいは信仰者としての八木自身の意識の、また別な側面が関係していると考えられる。

それを暗示しているのが、「私の詩」における「基督」と「わたし」との関係である。

四 「基督」と「わたし」の距離

——同一化の願望について

再び「私の詩」と(12)とを比較するならば、まず、(12)においては、「基督」は、一人称の「あなた」という明確な距離を持った存在として語られている。つまり、この詩においては「あなた」は作者である「わたし」に仰がれる存在として首尾一貫して語られている。

だが、「私の詩」では、両者の位置はもつと微妙なものとなっている。

「私の詩」においても、たしかに二行目を見るかぎりでは、「基督」と「わたし」との距離は明確に保たれているように思われる。しかし、八行目以降において自分の詩を「贖」であり「十字架を背負ふている」ものであると見なした上で、それらが「わたしの血をあびてゐる」としていることに着目すると、実は、ここで八木は、自らの詩作という行為を、「基督」が自ら十字架にかけられた行為になぞらえているかのよう¹⁾に読める。つまり、ここには八木が自らをキリストに擬せようとする意識が働いていると考えられる。このような読み方は、あるいは唐突であるかも知れない。だが、「わたしの血」という語句にこだわってみるならば、次のような詩を八木が書いていることに気づくのである。

(13) 手

冬の陽をうけて

手は白らけてゐる

この手に傷をつけ

血がたくるのを見れば

ふだんよりは気持ちしが楽にならうか

(14) 罪

冬あかるさの中になつて

からだから血をたくらせておれば

美しいたましいになれるだらうか

(15) ゲッセマネ

基督は

ゲッセマネの園で血をたくらせるように祈つた

出来るなら死をはなしたまへと祈つた

しかもそれは少しも自分のためでなく

人のためにもつと生きたいとおもつたのだ

こう信するだけで私の血が化するような気がする

右に挙げた詩はいずれも、「私の詩」の二か月後、大正十五年

一月に書かれている。これらの詩は、いずれも「血」と「たく

る（＝したたる）」という語句を使用しているという点において

共通しているが、「ゲッセマネ」という詩を視野に入れるなら、

これらの語句は、聖書の「贖罪」の象徴としての「血」のイメ

ージを喚起する効果をもつていふと考えられる。

私見では、特に「冬あかるさ」の簡潔で清澄なイメージに

「美しいたましい」を響きあわせて自らの祈りを託した(14)の「罪」

という詩は、八木が残した信仰詩という枠を越え、日本語で書

かれた数多い信仰詩のなかでも、屈指の美しさを示していると

思われる。

これらの一連の詩が存在する以上、「基督」に同化しようとする

八木の願望を読み取ることは、容易であろう。

たとえば(13)の「この手に傷をつけ／血がたくるのを見れば」

という語句にしても、やはり同じ時期の、

(16) 痕

ふと拍子をはづして

釘を掌のまん中へたててしまった

釘の痕をみながら

基督のいたわしい手のことを考へてゐた

という詩の「いたわしい手」という語句に照応するものであり、そこでも「基督」のイメージが念頭に置かれていることは明らかである。

もちろん、このような場合、「私の詩」以前の八木がそのような願望を持っていたのかどうかが問題となる。

「ゲッセマネ」や「痕」からは、信仰に生きる者としての八木の、キリストに対する敬虔な思いを読み取ることが出来るが、これらの例からだけでは、そのような思いが以前から八木の心に存在したのかは判断出来ないからだ。

この問題に関して、八木の場合、たとえば次のような例が挙げられる。

(17) きりすと

われにありとおもふはやすいが

われみづから

きりすとにありと

ほのかにてもかんずるまでのとほかりしみちよ、

きりすとが わたしをだいてゐてくれる

わたしのあしもとに わたしが ある

(18) このわたしは

きりすとにいだかれた

そのわたしのまほろしである、

そしてまたふしぎなことには

このわたしのうちに きりすとがかがやく

(19)

神

神の愚は人間の賢きにまさる

己れを虚しうし神をひとにみせよう

自分がすきとほつて背中神を人にあらわそう

これらの詩は、最初の二つが大正十三年十二月に、最後のものが一年後の大正十四年十一月に書かれている。また、それ以外にも大正十三年十二月には、

(20) ほんとうに

しぜんに詩のうまれる日は

じぶんみづからがとほいものになつたとおもふ

いのちがあることがたしかにかんじられる

みづからがかみのこころの窓となり

わたしのうたは

わたしのもつかみの観念とおなじたかさからながれいつる

という詩が書かれており、八木にとって「きりすと」や「かみ」と同一化しようとする願望は大正十四年段階までに決して奇異なものではなくなっていたことがみてとれる。このような発想は八木の信仰の初期から存在し、「神人冥合」といった言葉が大正十一年二月四日付の島田とみ宛の書簡にすでに現れている。

このように、八木の、神及びそのペルソナとしてのキリストへの同一化への願望は、彼のなかに「私の詩」以前から明確に存在していたことが分かる。

これに対して、信仰者がキリストと同一化しようと願うのは不遜ではないか、という疑問も可能であろう。問題が大きくなりすぎるため紙幅の都合上ここでは詳述しないが、このような発想はキリスト者として必ずしも否定されるべきではなく、むしろ八木の信仰は内村鑑三や富永徳磨といった人々の発想や表現を⁽¹⁾、自分なりに咀嚼しようと努めたものである⁽²⁾。

結局、このように同一化への願望の主題が八木の詩のなかで執拗に反復されていることは、この問題がいかに彼の信仰において重要な位置を占めていたかを示すものであるといえる。

五 形而上的世界の形象化の問題

前節では、八木の詩にみられる同一化の願望について言及した。しかし、神を中心とした形而上の世界それ自体のイメージをどのように表現しようとするか、という点に關していうなら、「私の詩」に到るまでの過程のなかで彼の表現は様々に揺れ動いている。

たとえば、大正十四年一月の変化に先立つこと半年以前の、大正十三年六月には、

(21) こども

こどもは

なぜ えらいかといへば

天国にちかくゐるからだ

じっさい

えんぜるがちきそばにあそんでる

うそではない

おとなとは せかいがちがふ

(22) こどもがよくて

おとなが わるいことは

まりをつけばよくわかる

(23) おもちゃ

おもちゃに

かかっていると

なんでもかでも

はじめといふものが わかってくる

天に 神さまがおいでなさるといふても

ほんとうだとおもへてくる

という詩を確認することが出来る。

これらの詩は、幼児という彼の眼前の存在に神のイメージを明確に仮託しているという点においてそれまでの彼の作品の系列には見られなかったものである。このことで、八木は彼の抱く神のイメージをより柔軟で生き生きとしたものに形象化している。その意味でこれらの詩は画期的であるといつていいのだが、しかし、同時に、現実の存在に彼の理想像を押しつけているという側面においては観念的な作品であることを免れないでいるともいえる。

だがもちろん八木を取りまく日常生活において「こども」はあくまで子供であつて神ではなく、その自明の現実、八木の

観念的な思い込みを突き破つて彼の詩に姿を現す。

八木が自己の詩に対する懐疑を集中的に書いた大正十四年一月には、次のような詩が書かれるに至る。

(24) わが児

いったんのいきどほりにわが児をなぐつても

泣きもせずになぐつてくるわが児をまたなぐつても

泣きもせずになぐつてくる おお

彼の詩が、生活という必然によつてどのような変容を強いられたかが、ここには他にみられないほど力強く現れている。

一読して分かるように、この作品からは、子供に神のイメージを仮託する観念的な脆弱さが消えている。ここに描かれているのは、たとえ彼が拒絶しようとしてもものつびきならぬ姿で迫ってくる現実の「わが児」の存在である。それは八木の意志を超えた関係として切迫した様相を現している。最後の行に示されている「おお」という声は、そのような、否応なく彼に背負わされている関係の裸形の姿を突きつけられた者の呻きである。その声に反映している緊張した現実が、この詩を、八木が書いた作品のなかでもっとも力感に満ちた美しいものにしてている。この詩に比べたとき、「こども」や「おもちゃ」といった詩に

示されている幼児の姿の観念的な仮構性は明らかであろう。

だが、このような、神を幼児に見出したりするような試行錯誤は、八木にとつて無駄ではない。大正十四年一月には、

(25) 千九百二十五年

大正十四年二月十七日より

われはまことにひとつのよみがへりなり

おんちち

うへさま

おんちち

うへさま

ととのうるなり

(26) もつたいなし

おんちちうへさま

にくしみにむかふ

われひとりとなりて

(27) われよべば

みえきたるなり

わがよぶは

みえきたるものこのころのうごきゆえならん

もつたいなしとなへんか

といった詩を見出すことが出来るようになる。これらの詩が画期的であるのは、八木の姿勢として、仮構されたイメージとして描かれる「神」という対象の側にはなく、その「名を呼ぶ」、つまり「称名」という行為自体の側に重点をおいているところにある。つまり、このような「呼ぶ」という行為を重視するということは、仮構されたイメージとして「神」を描くことの限界に八木が気付いていることを示す。

これらの詩に限定して考えるかぎり、「神」のイメージを仮構して詩に書くという媒介的な作業よりも、書くことと祈ること（「名を呼ぶ」こと）とを一致させる行為を八木は優位に置いているようにみえる。このことは、作品として評価するならば、豊饒なイメージを否定することになるため、その内容がやせ細ったものになりかねないという危険性がある。しかし、それが同時に、観念的な脆弱なイメージをも否定することにつながることも見逃してはならない。「神」の姿を幼児に仮託するといった試行錯誤は、八木をこのような地点に引き上げるために必要な過程であったともいえる。

右のような「称名」を重視する発想は、八木がなおも詩を書き続けるなかで、この時期以降後景に退き目立たなくなるが、後に形を変えて病床での「ノオト」のなかでふたたび現れるこ

となる。病床での「ノオト」については、それ自体興味ぶかい問題を有しているが、本稿の目的から離れるため、ここでは詳述しない。

いずれにせよ、このような観念的なイメージの否定は、八木の意識において、〈信仰者としての自己〉と〈表現者としての自己〉との関係が極限まで突きつめられていく、そのような志向が存在したことを示している。つまり、〈神〉を中心とする形而上的な世界を表すことが可能であるのか、という追及のなかから、折ることこそがその答えなのであるという飛躍をせざるをえない、そのような立場に八木は至っている。

もちろん、すでに述べたようにこのような傾向は、詩作それ自体を否定するものであって〈表現者としての自己〉を解体する危険をも内包しており、八木がそれ以降も詩作を続けていく以上、潜在化せざるをえない。だが、「基督」と「わたし」との関係が、〈神〉を中心とする世界をいかに表現するかという問いに転化されるとき、このような飛躍を起さざるをえないだけの追いつめられた地点に、大正十四年の、「私の詩」以前の八木は立たされているのである。

六 結論——「贖」^{いびん}としての〈私の詩〉

ここでもう一度「私の詩」の解釈に戻る。

ここまで検討してきたように、大正十四年時点において、八木は、自己の詩作に対する葛藤をもち続けながらも同時に信仰者として神及びキリストへの同一化の願望を持ち続けていた。

このことを背景として「私の詩」を解釈するとき、改めて重要となるのが、「わたしの血」という語句である。すでに引用した(13)や(14)といった詩に込められたキリストに対する同一化への願望を念頭におくならば、この詩に用いられている「わたしの血」という語句が「基督の血」をも暗示していると解釈することが可能となるからだ。

もちろん、詳細に検討するならば、用例(13)や(14)と「私の詩」とでは、その指し示す意味は微妙に異なっている。

つまり、(13)・(14)においては「血がたくるのを見れば」もしくは「血をたくらせておれば」といった語句に示されているように、あくまで八木の、キリストへの同化の願望が示されているにすぎない。それに対して、「私の詩」においては、「わたしの血をあびてゐる」というように、「わたし」はすでに血を流している存在として描かれている。ここで八木は「わたし」をキリストになぞらえて描いている、と読みうる。言い換えるなら八木は、ただあこがれるだけという地点を踏み越え、キリストの立場に自己を仮託していると読むことが出来るのだ。

このように考えたとき、だが、それでは、この詩において八木が自分を「基督」に擬していることに、一体どのような必然

性があるのか、という疑問が起こつてくる。

ここに至つて、前述しておいた、八木の、〈表現者としての自己〉の位置が問題となる。それは、言い換えるなら、対立する〈生活者としての自己〉と〈信仰者としての自己〉に対して、八木が、〈表現者としての自己〉をどのよう位置づけているか、その自覚の在り方が問題になる。

私見によれば、八木が、この詩の後半において自らをキリストになぞらえているということは、つまり、詩を書くという行為が、彼の意識のなかでは、十字架にかけられる行為と同様の「贖罪」の意義を担つていふことを意味する。「私の詩」が「私の贖である」という語句が書かれているが、端的に述べるなら、そこで「贖」になつていふのは彼の詩だけではない。詩を書く者としての、つまり、〈表現者〉としての八木自身が、罪を引き受けた「贖」であるという自覚がそこから読み取れる。具体的にいうなら、〈生活〉を背負う者として、信仰一筋に生きられないという罪の自覚がこの詩の背景に存在する。そのようなとき、「わたしの血」は、信仰と生活との矛盾を自覚する八木自身の苦痛を示している。だが、同時に、「わたしの血」は、表現による救済の可能性をも暗示することで、八木がその矛盾を耐え続けることへの根柢を与えている。つまり、書くことが「贖」であるという自覚によつて、八木は、〈生活〉という罪を引き受けている自分の立場が、人々の罪を背負つて十字架にかけられたキ

リストの立場に酷似していることを見出したのである。

だが、では何故、彼の詩が「贖」でなければならぬのか。そして、彼の詩が「贖」であることにはどのような意味が込められているのか。

そのことを考えるためには、次の詩が参考になる。

(28)あるときは

うたをつくるのさへ悪であるとおもふ

こんな詩などつくらなければ

ほんとにわたしのせけんのよくほうはなくなる

そうしたら一挙にわたしのこころはきれいになつてしまふ

かもしれぬ

だがまたかんがへてみれば

たつたひとつの手すさびでありほこりである

かなしみでありよろこびである

詩をつくることをすててしまふなら

あまりにすぎだらけのうつつるすぎるわたしのせかいだもの

ここにこうして不覚の子は

歯をくひしばつて泣くまいとしてうたをうたふ

右の詩は大正十四年一月に書かれたものだが、ここでは、第二節において指摘した、八木に内在する詩作への葛藤が手掛か

りになる。

つまり、八木にとって、「詩をつくること」が、それにまつわる世俗的な欲望を満たすことを含むものであるのなら、その限りにおいて、〈表現者〉としての彼の立場は、「妻と子」に執着する〈生活者〉としての彼の立場に通ずるものである。もしそうであるのなら、彼にとって〈書くこと〉は常に十字架を背負い続けることであるといつてよく、その意味では、彼の「詩」は八木の矛盾を体現しているわけであり、いわば「わたしみづから」に等しい存在である。現実の世界では〈生活〉を引き受けているために彼は自らを神に捧げることが出来ないでいる。だからこそ彼は、自己の矛盾などを含めた全てを反映している自分の「詩」を、彼の代わりに「贖」として捧げているのである。〈私の詩〉が「わたしの血をあびてゐる」という語句にはそのような意味が込められている。

最後にあらためて結論をまとめておくなら、ここでの八木の自覚が画期的であるのは、生活を引き受けなければならぬという〈信仰者〉としての不徹底な立場が、自らの表現を「贖」とすることによって、人々の罪を引き受けて十字架にかけられた「基督」の立場に近づくという逆説を発見した点にある。

結局、この「私の詩」には、〈信仰者としての自己〉と、〈生活者としての自己〉との間に存在する矛盾を、〈表現者としての

自己〉に対する認識を新たにすることで肯定しようとする、積極的な彼の態度を読み取ることが出来る。つまり、自己を、キリストと同じように罪を引き受けた存在とみなすことで、〈生活〉と〈信仰〉との間にある矛盾を矛盾のままに引き受けてゆこうとする彼の決意がここには現れている。

この詩の最終行において、「かならずあなたの肺腑へくひさがつて涙をながす」という語句がみられるが、この場合、右にみた八木の決意を踏まえるなら、「あなた」とは、「私の詩をよんでくださる方」であると同時に「基督」であると解釈することが出来る。つまり、ここで八木はこの詩を書くことで、「基督」に対して、その「あしもとにひざまづ」けない現実の状況と、それにもかかわらず、その状況をあえて引き受けようとする自己の決意とを訴えていると考えられる。言い換えるなら、この最終行は「(私の詩は) かならずあなた(＝「基督」)の肺腑へくひさがつて涙をながす」と読み直せるのであり、このような決意の激しさという点において、この詩を八木の「ぎりぎりの自己主張」とする田中清光の意見に同意することが出来る。

すでに私は、「私の贖」という語がこの詩の印象を緊密にすることを指摘しておいたが、それは、この比喩自体の生々しさと同時に、右に検討してきた八木の決意を象徴していることによると考えられる。自分の詩を「贖」であると断じる八木の自己認識が、最終行にみられるような決意と密接に関わりあっている

ることは、今までに分析したことから明らかであろう。

七 今後の課題

このように、「私の詩」という作品において八木は、（信仰者としての自己）と（生活者としての自己）、そして（表現者としての自己）という三者を最も緊密な形で結びつけて提出した。それは微妙な均衡であり、八木の激しい決意によってのみ可能になる。この時期以降八木はこの三者をこのような関係として自覚的に結びつけることはない。理念としてのこのような極限性はやがて緩やかに解体してゆくことになる。その解体がはつきり現れるのが、すでにその存在を示唆しておいた、病床における「ノオト」の記述である。それについては今後、別な形で述べることにしたい。

注

- (1)以下、八木重吉に関する伝記的事項については、全集第三巻所収の「年譜」（田中清光編）に拠る。
- (2)田中清光「詩人八木重吉」（叢書房1969・10）P・170
- (3)ここでは詳述しないが、田中清光は八木のこのような発想が、富永徳磨の「神人合一」の影響下にあると述べ、富永の名著である「基督教の根本問題」の対応する箇所言及している。（前掲書P・54及びP・

89-90）また、富永のもう一つの名著である「有神論體系」（警醒社書店T・6・6）にも田中が指摘したのと同様の記述が存在する。

(P・511-515) 教会に対して批判的になる以前の大正八年（一九一九）に、八木は富永から洗礼を受けており、その影響は否定出来ないだろう。ただ、表現という観点からは、たとえば内村鑑三の「キリストに在りて生き、我キリストに在りて生くるに至らざるべからず」(所感「内村鑑三全集 第14巻」岩波書店1981・10・P・246より引用)といった記述の方が、本文中の用例(7)の「きりすと／われにありとおもふはやすいが／われみずから きりすとにありと／ほのかにてもかんずるまでのとほかりしみちよ」という語句に、より近接しているといえる。

(4)キリスト教思想史の領域に踏み込むことは私の力量をはるかに超えるが、これらの発想の淵源を、プロテスタントイズムの祖、ルターの「ガラテヤ書講解」にまで求めうる可能性が存在する。（金子晴男「ルターの人間学」創文社S・50・2）ちなみに新約聖書の「ガラテヤ人への書（共同訳では「ガラテヤの信徒への手紙」）を、手元にある文語訳聖書（日本聖書教会）で引くと、二の二十に「我キリストと倍（むか）に十字架につけられたり。最早（もはや）われ生くるにあらず、キリスト我が内（うち）に在りて生くるなり。」という語句がみられる。八木の表現と当時の聖書の翻訳文體との関係なども今後の課題だろう。

*本稿は、平成五年度に広島大学大学院社会科学研究所に提出した修士論文の第四章に、加筆訂正したものです。指導教官である榎原修先生をは

す。じめ、有益な示唆を与えてくださった多くの方々に、心から感謝しま